

教会会報いずみ復刊第35号 特集／2021年教会全体研修会

知恵ある人の教えは命の「いずみ」である。(箴言 13章14節)

編集：愛宕町教会総務部発行者：穴戸俊介発行所：甲府市北口3-4-

23 日本基督教団愛宕町教会

TEL055-253-3150 URL <http://www.atagomachi-kyoukai.org>

P1

みことば「変わることはない真実」聖書 ヘブライ人への手紙 第13章  
7～8節 愛宕町教会牧師 穴戸俊介

あなたがたに神の言葉を語った指導者たちのことを、思い出さない。  
彼らの生涯の終わりをしっかり見て、その信仰を見倣いなさい。イエ  
ス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることはない方で  
す。

(ヘブライ人への手紙13・7～8)

「神の言葉」とは、別に言えば主イエス・キリストのことであり、ま  
た主を通してもたらされた福音を表しています。そうすると、主イエ  
ス・キリストとその福音を教会に向けて語ってくれた「指導者たち」と  
は、主イエスの直弟子たち、あるいは、続く次の世代の弟子たちを指し  
ていると思われます。そういう人たちは、一体、どのような生涯の閉じ  
方をしたのでしょうか。

直弟子の中で、亡くなり方が知られている人物は二人います。一人は  
イスカリオテのユダ、もう一人は漁師ゼベダイの子、ヨハネの兄ヤコブ  
です。ユダの亡くなり方はマタイによる福音書によれば自死、使徒言行  
録では主イエスを売って得た地に墜落死したと伝えられています。ユダ  
の死は聖霊降臨による教会誕生の前ですから、ユダが教会に向けて福音  
を語ることはなかったでしょう。また、ヤコブの死については使徒言行  
録で一言、「剣で殺された」という事実だけが伝えられています。

直弟子以外では、エルサレム教会の7人の執事のうちの一人、ステフ  
ァノの死が使徒言行録に伝えられています。新約聖書には、この三人  
の死の出来事しか記されません。しかし教会の伝承によれば、もっと大  
勢のキリスト者が殉教したと伝えられています。12人の直弟子は、ほと

んど全員が殉教したか流刑地で亡くなっています。

ヘブライ人への手紙の著者は、そうしたごく初期のキリスト者たちの生涯の最後に注意を向けるようにと促します。どうしてでしょうか。主イエス・キリストの福音を知らされ、信じて生き、死んだ人々が、その生涯を通して主と共に生きることを喜び、感謝して生活していたからであります。主と共に生きる生活は本当に幸いなのです。そして、後に続く世代にもその幸いを知って欲しいと思うからこそ、語っています。

先達たちの死から知らされることは、たとえその死が壮絶な殉教の死だったとしても、そこにいつも主が伴い、絶えず歩みを導き、慰め、戒め、支えてくださっていたという主の側の真実です。そして、「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることはない方」であるゆえに、主は、主イエスを救い主と信じるすべての弟子たちと共に歩んでくださるのです。直弟子や続く世代の弟子たちが世を去り、主の福音を語る指導者の顔触れが代わっても、キリストご自身は変わることなく、信じる者たちに伴い、その歩みを支えてくださるのです。

これは二千年経っても同じではないでしょうか。教会生活を過ごすうちに、懐かしい兄弟姉妹方を天国に送り、地上ではお目に掛かれないということが起こります。お別れの寂しさはありますが、地上を去った信仰者は主イエス・キリストから憶えられていて、しっかりと匿われ、神さまの御許の永遠の世界に復活させられる約束を与えられています。そして、わたしたちは今、この地上にあって、神さまの慈しみの下に持ち運ばれ、その神さまのなさりようを讃え、召された方々もまた永遠の世界において、神さまを讃える群れに加えられています。

「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることはない方です」と語るとき、著者は、「きのうの、今日の、永遠のキリスト」について、ここまで記してきたことを念頭に置いています。「キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その恐れ敬う態度のゆえに聞き入れられました」（5章7節）、「この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです」（4章15節）、「それでまた、この方は常に生きていて、人々のた

めに執り成しておられる...」(7章15節)。

主イエスは、信じる者たちが死に呑み込まれて空しくならないように、神さまに向かい懸命に執り成しの祈りをささげられ、そして今、天の神の右におられ、わたしたちのために執り成しをしてくださいます。わたしたちは、この頼もしい執り成し手である主イエスとの交わりの中に置かれ、生かされていることを憶えたいのです。

★  
今年は三人の兄弟姉妹が御許に召されました。その方々も、また今なお地上を歩むわたしたちも、主に結ばれ、神さまに連なる者とされていることで、一つの交わりの内にあることを憶えたいのです。人間の絆がもてはやされる時代ですが、わたしたちは、人間よりも強い、確かな腕に抱かれて、一つの交わりの内にあることをこそ、喜ぶ者とされたいと願います。

P2～P7

2021年 教会全体研修会

テーマ「教会形成・伝道」

《講師》 宍戸 達 氏 (愛宕町教会協力教師、前 国立教会牧師)

2021年7月23日(金・祝) 午前9時30分～12時 《講演・パネルディスカッション》

暑い中、早い時間からお集まりいただき、このように全体研修会を持てますことを感謝します。宍戸達先生のお話をお聞きし、その後、3名の教会役員、渡辺春美姉、井波忠志兄、古屋秀樹兄に加わってもらい、話を展開していきたいと思えます。

研修会と言いますと、個人の信仰の鍛錬、キリスト教を深く学ぶ時と思いがちですが、今回の研修会では、単に個人の信仰を深めるということではなく、皆で共有するものを得る、そのような時でありたいと願っております。

讃美歌197番を賛美し、聖書をお読みします。

聖書「イエスの母と兄弟たちが来て外に立ち、人をやってイエスを呼ばせた。大勢の人が、イエスの周りに座っていた。『御覧なさい。母上と兄弟姉妹がたが外であなたを捜しておられます』と知らされると、イエ

スは、『わたしの母、わたしの兄弟とはだれか』と答え、周りに座っている人々を見回して言われた。『見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。』

マルコによる福音書3・31～34

宣教部担当役員 清藤城宏



### 『教会形成・伝道』

お話をいただいてから、いろいろ思いめぐらしました。私に日本の教会について語れるのだろうか、とても戸惑ったのです。と言いますのは、確かに私は牧師の家に生まれ、これまで伝道者としての生活を60年ほど過ごさせていただきましたが、日本の教会が最も混乱した当時はまだ少年でしたので、その頃の教会のことを語る資格が全くないことに気づいたのです。それで今日は、私に語れる個人的な思い出と、公になっている記録とを混ぜ合わせながら、まとまらない語り方ですが、なんとか語れるところを話させていただきたいと思います。



一般に、日本の教会について考えるには、ある特別な二つの年によって区切られた、三つの時期に区分して考えるのがふさわしいとされています。これは、日本基督教団に所属している教会の人たちには言うまでもないことですが、日本での長い歴史を持っている教会の方なら、他どの教団の教会の人たちにとっても当てはまります。

その二つの年の、一つは1941（昭和16）年で第二次世界大戦の始まった年であり、もう一つはその戦争の終わった年、1945（昭和20）年です。日本の教会の歴史は、この二つの年によって大きく変化させられ、混乱の中に陥れられてしまいました。

#### (1)教団成立以前

1930年頃～1941年

（昭和5～16）

#### (2)戦時下の教団

1941年～1945年

（昭和16～20）

#### (3)戦後の教団

1945年～現在まで  
(昭和20～現在)

(1)まず、「教団成立以前」の日本の教会の姿です。そのころ、日本にはいろいろな国から宣教師の方々がやってきて、それぞれの教派からの援助を受けて伝道が行なわれていました。

私の場合をお話ししますと、教会に関する私の思い出の最初は、数え年で三歳から四歳にかけてのものです。私が三歳の時、1935（昭和10）年ですが、その年に父は山形県の新庄という町の教会に赴任しました。その教会は長老派の「日本基督教会」に所属し、敷地は500坪あり、本格的な会堂と牧師館を備えていました。立派な石の門を入れて右手に行くと会堂の玄関に至り、その前は一面にクローバーの庭が広がっていました。また、門を入れてまっすぐに行くと牧師館玄関に続きます。牧師館へ行く左側は広い畑となっていました。敷地には、大きな桜桃の木が表庭と裏庭に一本ずつ計二本あり、毎年たくさんのサクランボを提供してくれました。教会は、大手通りという幅の広い道に面していました。その名が示しているように、その道路をまっすぐ西に進むと、周りを大きな堀に囲まれた昔のお城の跡につながります。城郭そのものは戊辰戦争の時に焼き尽くされて残っていません。今は、戸沢神社となって名残をとどめています。

通りを挟んで向かい側の左手は広い空き地となっており、少年時代の遊び場でした。その奥の方にはいつも、小さな煉瓦の形をした木材が円い輪のピラミッドを形作るように規則正しく積み重ねられていました。下駄の材料となる木材を乾燥するための知恵でした。昨年NHKの番組で初めて知ったのですが、大河ドラマ「明智光秀」の主演を務めた俳優・長谷川博己さんの母方のご実家である大きな下駄屋さんのものでした。

翌年、町にはもう一つ、「聖公会」の会堂が建設され、こちらは600坪あって幼稚園を併設していました。私はその幼稚園の一期生で、その教会の司祭・佐藤公平先生のご長女と一緒にでした。ずっと後になってのことですが、私が国立教会の牧師をしていたころ、教会学校のお子さんが立教女学院を受験するというので推薦状を書いていた時、立教女学院の院長のお名前が気になり調べてもらったところが、やはり、その幼稚園で同期生だった佐藤公平先生のご長女、佐藤悦子、悦ちゃんでした。

た。そのうちお会いしようと思っていた矢先、急に亡くなられて、立教大学で大きな葬儀が営まれました。NHKの演劇部門で活躍していた二番目の弟・満寿哉さんには、「幼児期の思い出を留めておくことにするから」と妙な理由付けでお断りをして、私はご葬儀には出ませんでした。

また新庄にはもう一つ、「聖教会」という教会がありました。この教会は会堂を持たず、家庭で集会を持っていました。その教会の伊藤忠次郎先生を私の父は尊敬しており、親しい友人関係を保っていました。後に知ったことですが、伊藤先生の奥様は、聖学院大学を作った大木英夫先生のお姉様でした。大木先生は神学校では学年が上でしたが、互いに知り合う間柄でした。

このように新庄という小さな町で、後に比較的大きな教会やミッションスクールを担う立場になる者たちのつながりがあったということは、大変面白い巡り合わせだったと思っています。余計なことを語ったようですが、お分かりいただきたいのは、昭和10年ごろまで、外国ミッションとのつながりが保たれていた日本の教会の様子は、どこか落ち着いており、教会同士も互いに仲の良い間柄でした。父の教会や聖公会は会堂や牧師館を整えてその土地の伝道に励むというやり方でしたが、聖教会は個人の家を開放して伝道するというやり方でした。牧師同士では親しみを感じていましたが、背景にある教派、教会の在り方によって表に現れる形は様々あることを、私は子どもの頃から思わされていました。

★

ところで、聖教会というのは、愛宕町教会につながっています。大きな括りとしては「日本ホーリネス教会」という呼び名で、特別な歴史をもっている教会の一つでした。

「日本ホーリネス教会」について、もちろん詳しくは存じませんが、記録の上からだけ考えますと次のような独特な歴史を持っています。

1897（明治30）年 中田重治先生（弘前・東奥義塾、メソジスト教会出身）とC.E.カウマン夫妻との出会い。中田先生はメソジスト出身でありながら、アメリカ滞在中にはホーリネスの聖書学校に学ばれ、帰国。その後、教派を超えた存在として伝道しておられた。

1901（明治34）年 来日したC.E.カウマン夫妻と再会、協力して神田表神保町に中央福音伝道館を創設。

1917（大正6）年 「東洋宣教会日本ホーリネス教会」（体制刷新）設立。中田先生が初代の監督に就任。やがて、聖書学院が設置される。中央福音伝道館は教会に発展、書物の頒布や伝道師の養成へと広がった。

1930年代 リバイバル運動が活発化。その中で、中田先生側と聖書学院の先生方の間に、教理上の対立が生じ、1933年分裂。

1936年 「和協分離」が成立。聖書学院側が「日本聖教会」（淀橋教会に拠点。車田秋次先生が代表）を創立。1937年、中田先生側が「きよめ教会」（聖書学院に拠点）を設立。ホーリネス教会は二つの教派に分かれた。日本基督教団は、設立当初は各教派ごとに11の部制を取っていた。

「日本聖教会」は日本基督教団第6部。戦後、脱退し、1949年「日本ホーリネス教団」、「イムヌエル総合伝道団」、「日本福音教団」を設立。

「きよめ教会」は日本基督教団第9部。戦後、脱退し、1946年「基督兄弟団」設立。1958年「キリスト聖協団」が分離。また、日本基督教団に入らなかった尾崎派は、1946年「東洋宣教会きよめ教会」として再建。



(2)次に、「戦時下の教団」に移ります。

日本の教会は昭和10年頃までは落ち着いていたのですが、その後次第に、根底からその在り方を揺さぶられることとなります。日本はすでに軍国主義の道をたどり始めており、アメリカやイギリスとの関係は険悪となりました。宣教師の方々は相次いで帰国します。そして日本の教会のほとんどは、1941（昭和16）年に外国ミッションからの応援を辞退し、完全に「自給独立」の道へと様変わりします。もちろん、教会の体質ががらりと変わるのですから、大混乱です。

外国ミッションとのつながりが絶たれた教会の現実は厳しいものだったと思います。それは、私が小学校低学年の頃でした。今も両親に感謝していることですが、その頃、特別に貧しくなったという印象は持ちませんでした。学校は軍事教育でどんどん変わっていきましたが、家では少しも価値観が変わりませんから、軍国少年の私は母に突っかったことがありました。時代がどう変わっても少しも変わらない両親の姿を見

て、戦後、私は「キリスト教信仰に本当のものがある」という気持ちが強まり、高校卒業後まっすぐに神学校に行き、牧師になる道を辿ることになりました。

日本の教会の大きな枠が、軍事政権の圧力によって変えられていきました。文部省の下に宗教団体法が作られ、国家がコントロールしやすくなるようにと、あらゆる宗教団体がそれぞれ一つのまとまりという形になりました。それぞれの教会は信仰の言い表しにおいて特徴を持って教派に分かれているのに、それを有無を言わず一つにしてしまおうという国の政策ですから、このような特別な時期でなければ、「日本基督教団」というものができるはずはありませんでした。

けれども、それに向けての教会側の動きが無かったわけでもありません。教団ができる前に、日本基督教連盟（1923年）というものがあり、教派の違う教会同士が緩やかな連絡を取り合っていました。1920年代は、世界中でプロテスタント教会が「できれば一つになるのが良いのではないか」という雰囲気が高まっていました。1925年にカナダの合同教会が成立したことから、「日本の教会が合同教会になるのも良いのではないか」という発想を宣教師たちが持つようになっていて、日本基督教連盟が中心になってそういう動きをしないでもなかったのですが、試案が出されたままで、以後、軍国主義国家の締めつけが強まって、キリスト教会の内側で一つにまとまろうとする動きは潰されてしまいました。

それでも、プロテスタント教会内部では軍国政権の圧力に対処しようと努力して、「日本基督教団という看板の中に、各教派を一つにまとめて部制を作ろう」としましたが、文部省はそういうあり方を許さず、外圧によって、日本のプロテスタント教会の各教派はやむなく一体となり、巨大な統合体「日本基督教団」が設立せざるを得なかったのです。

文部省からの設立許可が下りたのは、1941（昭和16）年11月24日でした。まさに、半月あとの12月8日、太平洋戦争の始まる直前です。

★  
そういう流れの中で、一個一個の教会はどうだったかと言いますと、教会は健気に戦っていました。文部省・宗教団体法でキリスト教会全体が監督されます。一方で、特高警察が思想犯を取り締まり、地方の教会



を取り締まっていました。1942年6月26日、治安維持法違反の容疑で、ホーリネス系教会の教師97名が一斉検挙され、教団の教師資格を剥奪されます。当教会の鈴木鶴代先生もそのお一人でいらしたのです。

思いもよらない出来事でしたから、当時、日本の教会の指導者たちは、日本の教会の歴史が浅く経験不足なこともあり、押しなべて国家の成り行きに協調するような、あるいは追随せざるを得ないような立場に置かれました。指導者たちは国家権力と直接関わらなければなりませんので、難しい行動を強いられることが多かったのです。

ただ、それでも各個教会では事情が違っていたと思います。そのころ私は小学生でしたから詳しいことは分からないまでも、各個教会は、各地域の特高警察、今でいえば公安関係の動きを警戒しながら、日曜日ごとの礼拝を守り続けていたことを覚えています。そのころは、日本国民が集会を持つときには必ず宮城遥拝（天皇のおられる方角を向いて拝礼すること）を強制されました。日曜日の礼拝でも同じでした。しかしそのようなとき、各個教会では、それを無視して礼拝をささげました。見知らぬ人が出席しているときには、黙祷をもって宮城遥拝をしているような形だけ行って、用心深さを保ちながら、いつもの礼拝をささげるといふ具合でした。時々特高がやって来て、牧師の読んでいる本を調べるというようなこともありました。けれども、各個教会はできる限りにおいて普段と変わりなく礼拝を守り抜いていました。

「日本基督教団」ができるまでの事態は次のように進みました。

1939（昭和14）年4月8日 「宗教団体法」公布。

1940（昭和15）年6月12日 施行。

1939（昭和14）年 基督教連盟第17回総会の決議により、1940（昭和15）年「皇紀二千六百年奉祝」全国基督教信徒大会が青山学院校庭に約2万人参加して開催。教会合同準備委員の設置を決議し、9回開かれたのち、1941（昭和16）年6月24日、「日本基督教団創立総会」開催。11月24日、文部省認可。

(3)日本基督教団はこのように外圧によって無理やり作らされたのですが、戦争が終わりますと、当然、その縛りは解けます。そうしますと、教団から旧教派が離脱して行きました。この辺りから、三番目の「戦後

の教団」に移ります。1945（昭和20年）年8月15日に戦争終結となり、そして、敗戦直後は教会のみならず、押し並べて戦後の窮乏生活へと突き落とされました。

教団が最初に行ったことは、9月20日に開催された特別常議員会で、戦時中辞任させられたホーリネス系教師方の名誉を回復することでした。9月22日、教団教師へ復職なさいました。

1946（昭和21）年6月7～8日、教団臨時総会が開催されて、新しい日本基督教団が動き始めました。6月9日には全国基督教大会が、青山学院に約4000名のキリスト者が参加して開かれました。9月には憲法規則改正委員会が開かれて、教団の「教憲」「教規」の改訂が確定し、10月15～16日、京都の同志社大学で開催された第4回教団総会で制定されます。

ですから、日本基督教団は戦争中に無理やり作らされましたが、それが戦争が終わったからと言って、正式に一度解散して、また新しくできたということではありません。戦後に多くの旧教派の教会が教団を脱退していく中で、それでもなお残った教会が改めて組織改変を行って存続し再出発したものが、現在の教団です。したがって、当然、「教憲」「教規」を改訂しなくてはなりません。

そしてこれはとても大事なことですが、他にも旧教派がいろいろある中で、その「教憲」「教規」の下敷きとされたのは、旧日本基督教会のそれでした。このことは、他の教派を成り立たせていた制度あるいは秩序が退いて、旧日本基督教会のそれが存続したことを意味します。ですから新しい日本基督教団が設立されて、旧日本基督教会系の教会はその制度や秩序に比較的早くなじめました。けれども、そうでない旧教派系の教会、メソジスト教会、組合教会などはまごつくことが多かったでしょうし、それだけでなく、教団としての「教憲」「教規」はあるものの、それぞれの教会としてはそれらに親しみがないゆえに、いわゆる床の間に飾っておいて、実際はほとんどそれらを見捨て、なお以前のまま旧教派の感覚で各個教会を維持していたであろうことは推測できます。ですから、日本基督教団という形はありますが、やり方はかなりバラバラでした。

★  
もともと歴史的に言って、この世の教会には、教会を治めていく制度

として三種のものがああり、どの教会もその中のどれかを受け継いでいます。監督制、長老制、会衆制（あるいは組合制）です。

カトリック教会は、ローマ法王を頂点とした見事な「監督制」です。

「長老制」の教会は、各教会に長老がおりますが、その一つ一つの教会が独立しているのではなく、地域ごとに数個の教会の長老会が連絡を取り合って中会組織を作り、そこで各教会を見張りながら健全な長老制の教会を作っていました。

「会衆制」の教会は、各個教会の中で全て取り仕切り、他の教会とは同志的な結合で付き合っていく、そういうあり方でした。そして、先に述べてきたことから言いますと、教団は旧日本基督教会の伝統、つまり長老制を選択したことになるのです。

けれども実を言いますと、日本基督教団が設立されたとき、旧日本基督教会をも含めて、どの旧教派であっても、それぞれの教会で大黒柱であったようなものを取り去られてしまっていたのです。メソジスト教会など監督制の教会では、何事も監督の司令の下に行われてきた仕組みの中の肝心かなめの「監督の権限」を失い、戸惑いました。対照的に一個教会の権限を重んじる組合教会など会衆制の教会では、教会同士をつなぐ「同志的結合」が消滅しました。長老制の教会では、各個教会の上に君臨して見張る「中会組織」が廃止されました。日本基督教団となった時に、三つの教会のあり方の肝心かなめの部分が全部無いものにされてしまったのです。

要するに、日本基督教団所属の教会は一個一個バラバラに切り離されて、これまでの教派的連帯性は無いものとなり、一つ一つ独立したものとなって存在するのです。旧教派の中で互いに教会が健全に立っていくためにあった知恵が取り去られてしまいました。それでいて、先ほど申しましたように、各個教会は、教会あり方では以前のような旧教派の感覚をも残しているのです、教団の「教憲」「教規」は文字通りにはなかなか守られないでいます。

これが今日の教団の実情です。当然、付けは回ります。教団は混乱し、無秩序状態となります。

★

またさらに、教団に混乱をもたらす無秩序状態を来たせしたのは、もう一つ理由があります。1947（昭和22）年1月、北米8教派（10ミッション・ボード）インターボード連合委員会が組織されます。それ

によって、外国の諸教会からの支援金が、敗戦で傷ついた日本の教会を癒すためにささげられます。効果は癒し以上でした。

お金がたくさん入ってくるとなると、日本の教会では背負いきれない目新しい伝道プログラムが次々と展開されます。あちらこちらで伝道所が数多く新設されました。

けれども、ここでは立ち止まり、「教会が伝道するというのとはどういうことなのか」、考えてみるべきではないでしょうか。教会員が自らの信仰に生き、教会を支え、忍耐しつつ伝道に励んでこそ、そこに主の教会が成り立っていくものではないでしょうか。ですから「教規」には、(一種)

「教会」、(二種)「教会」、「伝道所」と分けて記載され、伝道の進展につれて、伝道所が本来の教会を目指して成長していくことが期待されています。「一種教会」が本来の教会で、「伝道所」はまだ一人前に到達していない教会です。今の教団の仕組みでは「一種教会」は大体50名以上、「二種教会」は20名以上で、完全に教会として自立しているのは「一種教会」です。「伝道所」はまだ一人前の教会となる前の集いとして定められていますが、今の教団の教会は一個一個がバラバラになり、各教会のあり方がおかしくないかを調べる互いのチェック機能が失われてしまいましたので、各個教会はやりたい放題ということになるのです。

そしてそういう状況のところに、戦後、外国からの多額の支援金が入り、一個一個の教会に平等に用いられるということになりましたので、まだ力のないはずの二種教会や伝道所も一種教会と同じような教会であるとの思い違いが生じるようになりました。多額の支援金によって伝道活動が活発になったかのように見えたが、日本基督教団の教会にとりましては、ある意味では命取りになったのではないかと思います。

★

教団では当時、豊かな支援金を基に「五か年開拓伝道」という計画を設け、伝道所がたくさん建てられました。伝道所の最初の年は、牧師に月に5万円の謝儀を差し上げ、年ごとに1万円ずつ減額し、6年目からは支援ゼロという仕組みです。伝道計画5年で教会として独立するのだという読みです。

けれどもそんなことは果たして可能でしょうか。できるはずがありません。それなら、その伝道所の伝道者はどうするのでしょうか。どこか

すでに成り立っている教会で、空席のできたところに転任するのです。ほとんどの伝道所は、いつまでたっても自立した教会となるまでに至りません。取り残されます。これは、戦後の教会事情として決して珍しいことではありませんでした。

私もまた、そういう伝道五か年計画の仕組みを経験させられました。神学校を卒業するとき、学長から任地が与えられます。その年、伝道五か年計画として始められたある伝道所で、あと1年だけで支援が打ち切れ、それと共に伝道者がいなくなるというところがありました。希望する人がいまして無牧となりますので、私が応じました。

私は、「教会は、御言葉の宣教で立ちもし倒れもする」と神学校で聞かされていました。教会が栄えるか栄えないかは、御言葉次第であると信じていました。したがって、「そこなら説教力の乏しい若輩の伝道者が鍛えられるにはふさわしい」と思ったのです。土地 30坪、建物18坪の、田舎の駐在所のような外観をしていました。赴任して間もなく、教会員のお子さんの勉強を見てあげることになり、そのうち彼が次々と友達を連れてきます。教会に行けば成績が良くなるという噂が立ち、中学校の先生まで後押しするものですから、子供たちが多くなります。20名ほどになり、「僕は君たちをタダで教える責任がないのだから、勉強したい子は300円持っておいで」と言いましたら、皆が持って集まり、今でいえば、小さな塾のようになりました。それで、なにがしかの収入を得ていたのですが、案の定、栄養失調症になりました。それでも、教会関係者の計らいで地元の大学病院の外科部長の学用患者として、かなりの間、無料で輸血を続けていただき命拾いしました。

★

それはそれで幸いであったのですが、一方で、そのころから私は、日本の教会が伸びないのは説教に問題があるのだと思い、ドイツやスイスの牧師たちの説教に親しんでいました。そして、その町の伝道所に6年いて、その後、仙台の教会で4年を過ごし、神学校卒業後10年して国立教会に招かれました。

あるとき、新教出版社で編集長の方と話していた際に私の持論を話したら、一蹴されました。「日本では、説教集など売れないよ！」と言うのです。私は驚きました。言い合いになりまして、「それなら先生、やっぺらんよ！」と言われるので、ヴァルター・リュティの説教

の翻訳原稿を渡しましたら、大売れに売れました。また、教団出版局から出したトゥルンアイゼンの葬儀説教「御手に頼りて」は、一か月で2000部が売り切れ、版を重ねています。きちんとした説教であれば、それが教会を作り出す力を持っているし、またそういう説教を牧師たちも信徒たちも求めているということが分かり、それ以来、新教出版社や教団出版局では説教集を出すことになりました。「教会は御言葉の宣教によって立つ」と言われていたことは建前であって、実際には本気ではなかったことが分かり、私はそういう日本の教会の全体の雰囲気に関心を覚えたものでした。

このような経験を積み、とにかく私自身は説教を整え毎週の礼拝を守ることにし、また、信徒の皆さんが礼拝での賛美を大切にできるようにと聖歌隊にお願いしました。そして、教会の秩序については長老制の在り方に立ち、長老会を中心にしてまとめていくことにしました。最初は国立教会の長老会の中にもメソジスト教会出身、組合教会出身と、教派的背景の違う方々がおられましたので、長老会の雰囲気がなかなかまとまりませんでした。また、長老会に相応しい人を教会員が選ばなければなりませんから、教会員にも、長老の職務や長老制の在り方を丁寧に説明しながら執行していきました。それで、時間はかかりましたが、とても良い長老会になりました。こういうことは教会生活の雰囲気の中でだんだんと身につけていくことです。

国立教会はある意味でスマートな、やるべきことはやり、しなくて良いことはしない、そういう雰囲気の教会になりました。そのようにして50年が経ち、180～190名ぐらいの礼拝参加者となりました。ついでのことですが、最初にお仕えした伝道所は、今はヴォーリズ設計事務所によって素敵な会堂を与えられ、市中で最も落ち着いたよい教会となっています。

★

以上、三世代にわたる日本の教会の様子を、私なりに振り返ってみました。日本の教会と言っても、それぞれが置かれている地域で特徴があります。その地域の伝道の歴史や人口の流動の仕方で、伝道のあり方は違ってきます。

しかし、ひとえに聖書の御言葉に忠実に仕えるという牧師の姿勢と、教会員が賛美することに心を配ること、教会の営みについて長老たちの考えが教会員に対して透明に伝えられること、そういうことがあれば、

教会は祝福され育っていくのだろうと思っています。

今、日本基督教団の教会の置かれている状態は非常に難しいと思います。その中で東海教区だけは、各個教会、伝道所が互いに見渡しサポートしていく、そういう公の仕組みを持っています。他の教区では教会も伝道所も皆、自力で立とうとして各々が勝手に振る舞っているために、「これが主の御言葉を伝える場なのだろうか」と首を傾げるような教会、伝道所が多くあります。これは教団が成り立った経緯、戦後の教会に多額の支援金が寄せられたことに正しく対応できなかったこと、各個教会を取り仕切るチェック機能が教団として働いていなかったことに理由があります。

教団は、今後どうなっていくでしょうか。頭を低くしていきたいものです。



### 『質疑応答』

#### (1) 達先生のお話を聞いての感想

渡辺 これまで、発足当時の日本基督教団のこと、戦中戦後の教団の変遷について聞く機会がなく過ごしてきた。戦時下の教会の大変さ、鈴木鶴代先生の教籍剥奪のことも知ってはいても内容を分かっていなかった。今日のお話から、日本の教会が様々な問題点を抱えつつ今日に至っていることを知ることができ、また今後の教会について考える機会を与えられ感謝。

井波 日本基督教団の中にある愛宕町教会という捉え方が苦手で、漠然とした印象しかなかったが、今日のお話から、成り立ちとあり様と、これから目指すところを示されたように思い感謝。

古屋 これまで、愛宕町教会は戦中のホーリネスへの迫害で苦難の中にあっただが、今は教団に属していると捉えていた。今日のお話で、そもそも合同教会になったことが外圧によったということ、戦後に教派離脱があり、残った教派が合同教会を買いたがそこに非常な問題があることを初めて知った。そういう中で、国立教会は説教と賛美を大事にし、長老会を育て、教会形成をされた。そういうところで教会は立ち、伝道していくのだと知った。教団の問題性と教会の伝道について聞き、感謝。

清藤 愛宕町教会に来て、初めてホーリネスを知った。熱心に祈るとい

う印象だった。鈴木顕栄先生は「新しい教団ができ、私たちはそこに所属している。ホーリネスということよりも教団」と強調され、教派に囚われない教会形成をしようとしていた印象がある。今日はその当時の詳しい経緯を聞き、初めて知ったことが多くあった。今後、教団についても考えたい。

## (2) 達先生への質問

渡辺 一つは、教団成立によって長老制の大黒柱のような中会組織が廃止された後、独立しバラバラになった教会同士の付き合い方について、具体的にはどのようなものだったのか。愛宕町教会は、鈴木顕栄先生が努力され、東海教区・山梨分区内の交流を作ってこられたと聞いており、今もそういう中で助け合いながら教会同士の付き合いがなされているが、そういう点について、もう少し知りたい。

もう一点は、国立教会が小さい群れから大きな教会へと成長していかれた、その過程で、会堂建築はどのようになされたのか、お聞きしたい。

井波 先に達先生が証しをしてくださった際に、教会の再建屋として幾つかの教会を再建されたとお聞きした。「教会とは何か」をはっきりと把握しておられたからこそのお働きだったと思うが、達先生から見ての「教会とは何か」をお聞きしたい。

また、教会の祝福について、「説教が聖書に基づいた丁寧なものであり、賛美の聲が高らかであり、教会秩序が教会員に透明であること」という3点が示されたが、「教会秩序が教会員に透明である」とはどういうことか、もう少しお聞きしたい。

教会の成長を測る物差しは、分かりやすくは教勢だと思うが、そういうこと以外の物差しはあるのか。また、客観的総合的な視点をお持ちの達先生から見て、愛宕町教会はどのように見えているか、お聞きしたい。

古屋 教派的伝統の違うプロテスタント教会が、今なお一緒にやっていることについて、達先生はどのようにお考えか。戦後に離脱した教派があったように、各々の教派で立った方が良いのではないか。また、国立教会は200名規模の大きな教会だが、教会員同士の交わりの希薄さやまとまりという点で問題はないか。愛宕町は70人で、一つの神の家族としてのまとまりが良いようにも思うが、教会の規模については、どのよ



うにお考えか。また、説教にも並ぶ「賛美の大切さ」ということについて、少し詳しくお聞きしたい。



達先生 会堂建築について、国立教会に関して言いますと、お金の無い中で建築するという感覚でした。赴任した時の国立教会は、戦後に建てられた会堂一間だけの建物で、段々と人が入りきれなくなり、木造でしたから広げて、とにかく礼拝できるようにと肩を寄せ合うようにして集っていました。礼拝に参加しているだけで満足していて、建物の不具合などあまり気にしておらず、そのうちに何とかなるのだろうと思っていました。

会堂を広げるためには土地を広げなければなりません。そのうちに不思議なことに、土地が手に入ることになり300坪になりましたから、そこで初めて新会堂を建築できました。その後、また不思議なことに、土地110坪が手に入りました。今後再度の会堂建築が必要になった時のために、何としても買いたいと思いました。

土地購入も会堂建築も、また牧師館建築も、それに至るまでには様々な課題もありました。時には無茶と思うような行動をする中で、人間の計算では足りないところを神さまが見事な、また時にユーモラスな形で解決してくださいました。もちろん、神頼みで何でも神さまがくださるからと計算するのではなく、「教会のためにはどうしてもしなければならぬ」と皆が切羽詰まった気持ちでやるところでは、思いがけない仕方で神さまが支えてくださるという経験をしてきました。ですから、会堂建築をするたびに、教会員の信仰が強まるのです。会堂建築は資金がたっぷりあるからするのではなく、「どうしても」という必要があるところで何とかなるのだと思います。

★

次に、近隣教会とのつながりについてです。国立教会のある多摩地区には、人口流入を見込んでたくさんの伝道所が建てられましたが、流れは千葉の方に向いていると気づいた時に、潰れる教会が出てくると思いました。それで国立教会は、自らが伝道所を建てるのではなく、近隣の教会が弱ってきた場合に支える拠点となる教会となれるように、できる限り大きくなろうと考えました。

教会は、全国版になることを目指すのではなく、やはり立てられたその地域に対する伝道の責任があると思いつつ牧会してきました。分区や教区との付き合いについては、私はそこに関わる時間はありませんでした。しかしその根底には、やがて助けを必要とする教会が現れた場合のために、国立教会は力を蓄えておこうという覚悟を持って伝道に励んでいました。それは非難の対象にもなりましたが、神さまがご存知でいてくださると思っています。

★ 「教会とは何か」、私は素朴に「礼拝する人が集まっているところ、それが教会」と考えています。教会は、外観でも歴史の有る無しでもなく、「礼拝する者の群れ」です。ですから、そこに教会形成の基本があると考えます。教会員の籍の上での人数よりも、礼拝に実際にアクティブに参加する人数の方が、教会を考える上では大事だろうと思います。今礼拝に集まる人たちの群れ、それが教会です。

★ 「長老会、教会秩序が透明であること」については、長老会が今どんなことを考えているのか、教会員に報告することは大事です。一握りの人たちだけが教会を牛耳るようなことになると教会は衰えると思います。教会員一人一人が皆、教会のことを分かっているなければなりませんから、そういう点で公平であれば透明であると言えると思います。教会は、礼拝者一人一人が均等に教会を支えていますから、一部の人、発言力のある人が牛耳るようなことになると教会は伸びません。

ですから、教会を測る指数は出席人数だと思っています。出席者が豊かになる礼拝が守られることです。

お金の問題は、常々儉約しつつきちんとしていれば、いざという場合には、神さまが知恵をお与えくださるのです。ですから、経済的な面においても透明に、明らかであることが大事です。

★ 愛宕町教会について、私はとても素敵な教会だと思っています。このように賛美の聲が高らかに奏でられる教会は、今はあまりありません。

★ 教派的なつながりについては、今は「教派」がめっちゃめっちゃになっています。かつては、「この教会はどの教派か」が分かっていたのですが、この頃では教派を分らない牧師が増えてきましたので、メソジスト系

の教会に旧日基系の牧師が赴任したりしますと、まず聖餐式のやり方から分からない、長老会の位置付けが分からないというようなことがあります。以前は、牧師が赴任する際には、赴任先の教会の伝統を重んじたものですが、最近では、神学校があたり構わずどこにでも赴任させ、異動させますので、赴任先の教会を駄目にしてしまうということが起こっています。その教会の歴史や教派的伝統は家風のようなもので、とても大事なものですが、それを大事にできないような牧師の配置がなされていて、日本の教会が壊れていっているように思います。

私がどのような見通しを持っているかと言いますと、御言葉と賛美に養われる教会らしい教会であれば、その教会は生き残ると思います。しかしそうでなければ、教会は死に絶えていくでしょう。こんな言葉を教会について言うてはいけないのですが、一つ一つの教会を見ますと支えようもなく潰れていく教会が出てくるだろうと思います。

そういう中で、「すべての民を弟子としなさい」との御言葉に忠実に生きようとする教会が生き残りますから、そういう教会同士がやがて手を握り合う時が来るだろうと思います。それまでは孤独な歩みをしなければなりません。



清藤 先生のお話から希望を見出すところがあったり、また教団の内情を聞いて暗い気持ちになったりもしましたが、神さまに信頼して前に進みたいです。愛宕町教会も力を蓄え、山梨県下を背負っていくような教会になれたらと思われました。

讃美歌195番を賛美し、穴戸俊介牧師に祈っていただき、皆で主の祈りをして散会といたします。

P8

2021年度夏期伝道実習報告

「愛宕町教会での夏期伝道実習を振り返って」

東京神学大学大学院1年 堺正貴

8月6日土曜日、夏の夕闇の濃くなる中、いささか緊張しつつ愛宕町教会を訪れ、初めて穴戸先生ご夫妻とお嬢さんと対面することとなった。今年には教会に隣接した教育館が雨漏りで使えないということから、武田

通り沿いにあるアパートで生活することになっていた。宍戸先生ご家族皆さんで実に明るく親切に必要な食器や日用品など選んでくださった。その雰囲気はほっとさせられ緊張がなごんだ。普段なら皆で食事をともにするところだったようだが、コロナ感染症が拡大しつつある時期だったので当然取りやめになった。おみやげにおいしいパンをくださった。

夏期伝の際中、この出会いの第一印象がますます深まっていった。その印象とは、コロナ禍という普段とは異なる状況の中でも、一人寂しく緊張した面持ちでやってきた夏期伝生を何とか普段通り暖かく迎え入れようとするところ尽くしである。

以前の『いずみ』の夏期伝報告を読むと愛宕町教会の夏期伝道実習はきついことで伝説的だったと書いてある。確かに聖研が8回から10回あるというのは、厳しいような気がする。しかし誰からも事前に知らされず、報告にも書かれていなかったことがある。それは家庭集会における聖研の後、招いてくださったお家から供される御馳走を食べ皆で濃厚な交わりを持つということである。はじめてこの話を聞いたときは驚かされた。なんだ、そんな楽しい会ならさほど緊張もしないし、少々失敗してもその後の交わりで紛らわすこともできるのではないか。みんな、ずいぶん楽しくやっていたんだな。そんな感想が浮かんだ。

コロナ禍によって食事の交わりの会は一切できない。しかし、それでも手料理でなんとかおもてなしをしたいという気持ちはひしひしと伝わってきた。多くの方々から手料理や山梨の名産をいただいた。毎週甲府周辺の名店に食事に連れて行ってくださる方もいた。月曜日の発送のお手伝いの後は、宍戸先生とお嬢さんの手作りのお弁当が待っていた。ともかく山梨の産物と手作りの料理のおいしさは今回の夏期伝道実習を実に楽しいものにしてくれたのである。

こうした愛宕町教会における交わりの熱さは、礼拝を中心に生まれたものである。コロナ禍においても礼拝・集会は普段通り行われていた。東京では日々5千人に達しようとするコロナ感染者が出、奉仕教会では讃美歌は歌えなかった。そうした中、神を賛美するために吹き上げるような大きな声で信徒の方々が讃美歌を歌う礼拝はまことに感動的なものであり、また讃美歌を歌うことの素晴らしさを新鮮に味わわせてくれた。

信徒の方々のこうした熱意が夏期伝生の聖研を支えてくださったと思

う。家庭集会での食事の楽しみがない中、毎回多くの方々が集まってくださったのには感激した。むろん単に神学生の勉強のためということではなく御言葉そのものへの激しい情熱からであった。そのような信仰から私もまた新たに御言葉を伝える情熱を与えられることになった。

聖研で説明した後、熱心な兄弟姉妹からの質問に答えることから多くを学んだ。とりわけ私の未熟な答えに満足しなかった穴戸先生がさらに問いただし、最後に自分のお考えを述べることから「聖書に聞く」ということはどういうことかを学ばせられた。自分の準備不足を痛感させられたが、私はいささかいかいかわられたようで、伝え方が未熟なだけで勉強家ではあると先生は誤解されたようであった。

その誤解を前提にして、第一回目の聖研後、皆が帰ったあと次のようなアドバイスを受けた。「君に誘惑があるとすれば、一所懸命勉強してもこの信徒たちではどうせ分からないんだからといい加減なところで妥協してしまうようになることかな。信徒はそういうの分かるからね。最善の努力をしたうえで努力の跡を消してどう御言葉を取次ぐか。その取次を牧師が怠れば教会が荒れる」。

こうした言葉に刺激を受け、いい聖研を行いたいと激しく心に火が付いた。祈りつつ準備したが時間が足りずいつも不完全燃焼で終わってしまった。難しかったのは、神学的になり過ぎると難解といわれ、さりとて福音を平板な言葉でまとめれば何十年も信仰生活を送っている者には常識と切り捨てられてしまうことである。ようやく、ああ今日は御言葉がほんとうにわかったと言って皆が帰っていくのが理想なのだなと思いついた。確かにその地点に到達するには8回の聖研は少なすぎた。ともかく厳しい言葉やアドバイスに満ちた聖研は私には新鮮で実に楽しかった。この教会に派遣してくださった神様にほんとうに感謝した。

普段ならCSキャンプで子供たちと遊んで夏期伝生の人格が分かったうえで家庭集会で濃厚な付き合いをするという。それができず教会の兄弟姉妹達にとって私はいつまでもどこか馴染まないクールなガイ過ぎたようだ。私の熱意は伝わらず、皆と車座になってもっと熱く御言葉を分かち合うことができなかつたのは残念至極である。

イエス様にとって神の国とは飲食の国であったと大貫隆先生は言った。私にとって愛宕町教会とは御言葉を中心にそんな神の国を体現していて訪れた者の心を熱くしてくれる教会であった。

以後ここで学んだことを実践できるように努力し神様と皆様の恵みに応えたいと思う。

#### 編集後記

▼コロナ禍にある教会生活でしたが、昨年は実施出来なかった教会全体研修会を開催し、夏期伝道実習生も迎えることが出来ました。そのことは、私にとっては与えられていた御言葉「見よ、新しいことをわたしは行う。今や、それは芽生えている...」（イザヤ43：19）の実現を体験した思いで嬉しい年でした。礼拝後の交わりコーナーは今なお持つことが許されない状況ですが、その分、礼拝を通して神と真っすぐに向き合うことが出来たのではないのでしょうか。今号は修養会の全記録を掲載しました。36名の参加者が与えられ、宍戸達教師から教会の歴史と、育っていく教会の姿を示されました。愛宕町教会も成長し続ける教会であることを願ってやみません。（K.S）